

会えるといいね

「私たちに、同じ年の子どもができたらおもしろいな」

教室で2人、笑いながら話した記憶がある。そして今、一方は産まない人生を選び、一方は産みたくて病院へ通っている。40歳を過ぎ、思い通りにならないことは増えるばかりだ。

ツンは数少ない友だちのひとりで、高校からのつき合いになる。旧姓ツジモト、だからツン。3年前に結婚し5歳上のご主人と不妊治療を続け

ている。

「子ども好きやろ？なんでなん？」ツンの問いに、私はあっさり答えた。「欲しかったけど、この歳から子ども中心の生活はしんどいし。もういいかなって」。ツンは辛いと聞く不妊治療を、なぜ頑張りつづけるのだろうか。

結婚当初は、妊娠と自分の都合とを天秤にかけ、タイミングを選んでいた。「仕事も忙しかったし、ぜんぶうまくやりたかってん。めっちゃめ

っちゃ甘かったわ」。仕事を辞め、本格的に病院へ通いはじめてからの治療は、受け身だったせいもあり作業のようだった。毎日打ち続ける注射に、処方されるさまざまなホルモン剤。医師からの指示をこなす状況では手応えを感じにくく、治療費だけがふくらんでいく。結果が出なければ、ダメでしたね、の一言だ。

積極的に治療に向き合いはじめてきっかけは、《胎内記憶》について知ったことだった。

あのお母さんのところに行きたい！

産まれる前の記憶をもつ子どもは、空から親を選んで降りてきたと語ることも多いそうだ。

冷凍保存された受精卵であって

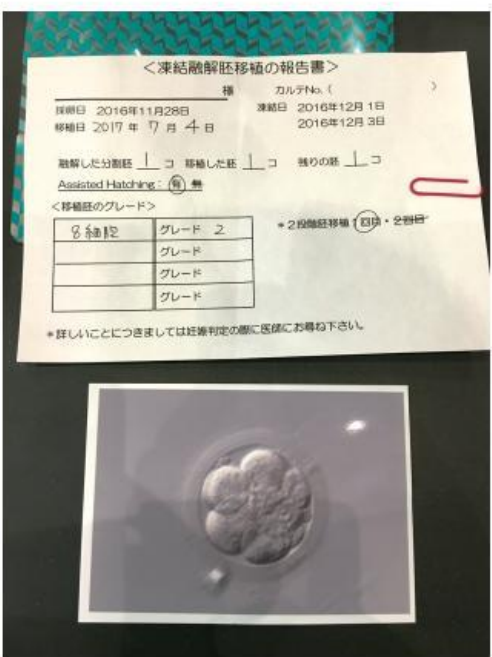
も、形を成す前の単なる細胞ではなく、意思をもった子どもなのかもしれない。まだ卵だけど、すぐ近くまで来てくれていて……そう考えると気持ちになるのだという。たとえ妊娠に至らなかつたとしても、いつとき子どもを身近に感じられるのは何よりの励みになる。無事に産まれることが《ゴール》で、それ以外は《失敗》、では決してない。未来の子どもを想い治療に向き合うツンは、すでに母なのだ。

「今回会えなくても、また私を選んで戻ってきてくれるかもしれへんし」

40代の不妊治療は簡単ではない。体力や治療費に限界が近づけば、諦めることも考えなくてはいけない。

ツンは1週間前、受精卵を子宮に移植したそうだ。これまでは妊娠判定の度に焦りを感じていたようだが、今回はのんびり構えている。「会えたらいいなあ、くらいに思えるようになってん」

ツンからは前向きで、気負わない印象をうけた。「会えるといいね」私はツンの子どもの写真に声をかけた。



お母さんにツンを選んだ理由を聞いてみたい